スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

ほーき雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スマブラメンバーを１つの町に凝縮中

【Ｎコード】
Ｎ２６９８Ｚ

【作者名】
ほーき雲

【あらすじ】
五武山市、僕の小説の大半はここが舞台である。だったらスマブラメンバーをここに住ませてみたらどうだろうか？いちいち五武山市に来る必要はない。最初からいるのだから。（笑）
そんなテンションで始まったが・・・。

プロローグ（前書き）

予告編の続きです。見てない方は活動報告のアーカイブをご覧ください。

プロローグ

ある日、ほーき雲は立ち上がった。

ほーき雲「スマブラメンバー全員探すって絶対1人じゃきつい。しかも五武山市っていう広い場所に散らばっちゃってるんだもん。」

実は全員ほーき雲の近所にいるのだが・・・。

ほーき雲「誰かに救援要請しよう。」

マスターハンド「あれ？ほーき雲からメール？」

クレイジーハンド「ほーき雲からメール？」

D「ほーき雲からメール来たよ。」

『【救援要請】五武山市内に散らばったスマブラメンバーを全員僕の家の近くに集合させてください。僕1人じゃ足りません。よろしくお願いします。』

ちなみに、Dって何だ！？って思った人は大規模な逃走中にて詳細を知ることができます。

マスターハンド達「探すか！」

全員ほーき雲に協力するようになった。

みんなほーき雲の家から離れたところに行った時、スマブラメンバーは・・・。

リンク「みんなどうする？」

リュカ「家でゲームやる！」

ルイージ「４人１組になって分かれよう！」

全員「賛成！」

こいつらが家にいる限り、ほーき雲達はスマブラメンバーを１人も見つけられないだろう。

続く

ミサカ捜索隊（前書き）

どうなると思いますか？

ミサカ捜索隊

ほーき雲はスマブラメンバーを探す途中、ある少女に出会った。

ほーき雲「ちょっと打ち止めちゃん。人探しに協力してくれない？スマブラメンバーを探しているんだけどね。この五武山市のどこにいるのかわからないんだ。そこで君を含めた９９７０人でスマブラメンバー達を探して欲しいんだ。」

打ち止め「それじゃ、全妹達（シスターズ）に指示してみる。ってミサカはミサカは了解してみたり。」

その瞬間、いきなり９９６９人の人が現れた。しかも全員全く同じ服装、全く同じ体型である。

妹達（シスターズ）。

それはある電撃使いのクローン体である。２０００＋１体が造られたが、そのうち１００３１体はある『最強の超能力者』によって殺されている。

ちなみに、＋１体というのは制御個体で、ほーき雲が出会った少女のことである。

ほーき雲「これだけいれば全員見つかるだろう。」

打ち止め「でも、ミサカは行かないよ。ってミサカはミサカは自分の参加だけは断ってみたり。」

ほーき雲「十分だよ。９９６９人もいるのはありがたい。さらに僕もいれてマスター達もいれて９９７３人。これで見つからなかったらヤバイよね。」

そして夕方。

ほーき雲「かなり疲れた・・・。見つかった？」

検体番号１２３４５「すみません！見つけたのですが逃げられました。とミサカは失敗報告をします。」

ほーき雲「どこで見つけたの？」

検体番号１２３４５「ちょうどこの家の隣ですよ。とミサカは報告します。」

ほーき雲「・・・え？」

検体番号１２３４５「ですから、この家の隣でマリオと思われる赤いおっさんを見つけました。とミサカは再度言います。」

ほーき雲「・・・まさかみんなもうここに住んでるの？」

検体番号１２３４５「その可能性が一番高いです。とミサカは脳内の計算により当然の答えを出します。」

ほーき雲は隣の家をノックしてみた。

マリオ「あっ、ほーき雲だ。ゲームしたいの？」

ほーき雲「・・・君達ここに住んでたのね。他の人達は？」

マリオ「みんなこの近くの家に住んでるよ。」

ほーき雲の力は抜けてしまった。その後、どうやって夕御飯を食べて、眠りについたのか覚えていなかった。

続く

ミサカ捜索隊（後書き）

いきなりスマブラ以外のキャラクター出しやがって・・・。

市長が死んだ。（前書き）

いきなり何があったんだ！？

市長が死んだ。

翌日

ほーき雲「ああ、よく寝た。」

リンク「こっちはお前の家に連れていくの大変だったんだぞ。いきなり気絶しやがって。」

ほーき雲「すぐ隣だろうが。」

ヨッシー「そうそう、ここら辺に空き家いくつあるの？」

ほーき雲「５０を越えてるって聞いた。」

ピット「だから１人１件でいいんだ。」

ほーき雲「とにかくたくさんあるんだよね。」

新聞社の人「号外！号外！大変なことになったぞ！」

ほーき雲「大変なことってなんだ！？」

ほーき雲は号外新聞を１つもらう。

ほーき雲「なんだってぇーーー！！！」

D「どうしたの？」

ほーき雲「市長が・・・・・死んだ。」

ほーき雲以外「なにぃぃぃぃーーー！！！」

ほーき雲「それでさ、新市長の立候補者がコイツ1人だけなんだけどね。」

ほーき雲以外「はぁぁぁぁぁーーーー！！！！」

ほーき雲「ね。ヤバイだろ。」

ネス「来たばかりなのになんでこうなるの？」

ほーき雲「知るかよ！しかも問題はここじゃねぇ！」

スネーク「じゃあなんなんだよ！」

ほーき雲「五武山市民のほとんどがコイツを支持してるんだよ。」

ほーき雲以外「ヤベェェェェェーーーーー！！！！！」

ほーき雲「ほら、あっちで『ヤツ』が演説してるよ。」

ほーき雲以外「本気か・・・・。」

続く

市長が死んだ。（後書き）

立候補者は危ないやつらしい。

新市長大作戦（前書き）

誰なんだよ！？だいたいわかるかな？

新市長大作戦

ほーき雲「ほら、あれを見ろ。」

ほーき雲が見ているものは・・・。

タブー「これから私タブーが新市長となるのです！皆さんぜひ私に投票をお願い致します！」

ほーき雲「わかっただろ。大声でタブーが演説してるんだ。しかもあいつ以外に立候補者はいない。このままじゃタブーが新市長。となれば五武山市は終わるだろうな。」

リュカ「こんなのどうすりゃいいんだよ・・・。せっかく来たばかりなのに・・・。」

ほーき雲「方法なら1つある。他の誰かが立候補して選挙に勝つんだ！」

マスターハンド「しかし、それが難しいのは自分でもわかってるんだろ。今のタブーの支持率は最大。そこをどうやって勝つのか思い

付かないんだろ。普通そうだろ。誰が立候補するのかすら決めてないのにな。」

マスターの発言は最もである。しかし、それを否定するかのように発言をした者がいた。

D「もし、僕を含めた昔の仲間たちの中で、『リーダーシップ界の王』と呼ばれる男が立候補したらどうなると思う？」

ほーき雲「そういうやつがいたら苦労しないよ。」

D「そういうやつは実際にいる。しかも遊び、仕事に関わらず最高のリーダーシップを見せる男。そいつが何回仕切っても誰も文句を言わない。しかもそいつの夢は政治家だ。市長になるのも第一歩になるはずだぜ。そいつの夢のため、タブーからこの五武山市を守るため、そいつを立候補させてみないか？」

全員「おおーーーーー！！」

ほーき雲「おい、1つ言っておくぞ。勝てるかわからないのはわかっているが、もし勝ったとしたら、タブーは攻撃するかもしれない。その時のために、選挙当日は戦闘態勢に入っとけよ。」

アイク「そこんとこは大丈夫だぜ。なぁみんな。」

アイク以外「おおーーーーー！！」

D「よし！その勢いだ。それじゃ、やつのところへ行きますか。」

続く

新市長大作戦（後書き）

果たしてどんなやつなのか？タブーが市長になることを止められるのか？

T（前書き）

この小説は文字数の目安を４００～７００文字にしてるから毎日更新できそう。

T

D「おーい。」

???「なんだ、Dじゃないか。」

D「お前、五武山市の市長になれるとしたらなりたい？」

???「そりゃなりたいさ。地方自治でもいいからやってみたいもんだな。ところで、たくさん人を連れてきたな。どうしたんだ？」

ほーき雲「突然市長が死んで、新市長立候補者がタブーっていう悪いやつしかいないんです。」

???「そりゃいけねぇ。僕が新市長立候補してやる。ちなみに、僕の名前はTだ。」

ほーき雲「T？Dに続いてTですか？」

T「そうだけど？」

ほーき雲「おいD。これはどういうことだ？お前の仲間はアルファベット1文字のやつしかいないのか？」

D「うーん。それが大半を占める。でもそれ以外もいることにはいる。」

ほーき雲「突然だけど例え話しようか～。例えば、僕がマルスに腹が立ったとして。」

マルス「なんで俺なんだよ。」

ほーき雲「僕がマルスをボコボコにしたとする。この小説を読んでいる人にはマルスが好きな人が若干いることにはいるんだよ。」

マルス「なんで若干しかいないんだよ。」

ほーき雲「だけど君はオリキャラだから君のことが好きなやつは超不人気マルスよりも少ないってことになるんだな。」

D「それがどうしたのかな？」

ほーき雲「つまりマルスよりも強力に痛めつけてもいいってことになるんだよ。」

D「なんで何気なく武器持ってるのかな？」

ほーき雲「僕だって武器くらい持つんだよ。さぁどうする？」

D「そもそもなんでこんな目にあっているのかわからな・・・・」

ドカーン！

Dは奇跡的に生きていた。

ほーき雲「もっとまともな名前のやつを友達にするように。別に今の仲間を見放せとは言わないから。」

D「また今度紹介します。」

何はともあれ、新キャラのTと共にタブーの新市長阻止作戦が始まった。

続く

T（後書き）

Dはいい人なんですよ。今回ひどい目にあっただけで。

みんなで作り上げる作戦

ほーき雲たちは選挙に向けて頑張っていた。立候補するのはTだけだが、ほーき雲やスマブラメンバー達には絶対にTを新市長にしなければならない理由があった。彼を市長にできなければタブーが市長になるのだ。

ほーき雲「僕達も協力してるし、Tも演説がんばっているし、なんとか新市長になれるかな。」

D「僕だってちょっとケガしてるけど、Tの直接的な友達としてしっかりフォローしていかなくちゃ。」

ほーき雲「よくちょっとのケガで済んだな。」

ほーき雲達は、Tが新市長になるために、タブーが新市長になるのを阻止するために、2つの思いを込めてポスターの貼り付けを始めとする手伝いをしている。

選挙前日

T「きっと大丈夫。みんな頑張ってくれたじゃないか。タブーがなんだ。あんなやつを市長にはしない。」

ピット「頼もしい。」

ほーき雲「なあ、みんな頑張ったもんな。タブーなんかに負けないよな。」

全員「おおーーーーーー！！」

ほーき雲「あとは結果を残すのみだ！」

続く

みんなで作り上げる作戦（後書き）

次回は選挙本番。Ｔか？それともタブーか？

選挙中、役所前

ほーき雲達は五武山市役所に来ていた。・・・と言っても来ているのはほーき雲、D、Tの3人だけ。スマブラメンバーまで全員で来られたらすごいことになるからだ。

ほーき雲「次々と人が市役所を出入りしている。みんなで投票してるんだね。」

D「あれ？タブーも来たぞ。」

タブー「おや？もしかして突然現れた2人目の立候補者とは君のことかなほーき雲君。」

ほーき雲「僕じゃない。こいつだ。」

ほーき雲はTの腕をつかんで言った。

タブー「知らないやつだな。」

ほーき雲「お前、ポスターはちゃんと見ろ。市のあちこちにTって書いてあるだろ。どこにほーき雲の名前があった？言ってみな！」

タブー「こんなことで強気になりやがって。俺がそいつを知って無かろうが、選挙で勝てばいいのだ。」

T「お前みたいなやつには負ける気がしないな。協力ということを知らなそうだ。」

タブー「何を言おうと俺の演説は大人気さ。このままだと俺勝つよ。勝って恥かかせちゃうよ。」

ほーき雲「やってみな！」

役人「これより投票を終了します。得票計算までしばらくお待ちください。」

ほーき雲「さぁ、投票が終わった。あとは結果だけだぜ。」

続く

選挙中、役所前（後書き）

これ一応コメディーだよね？本気でいがみあっちゃったりバトルしたり・・・。

5倍

役人「選挙結果が出ました！T氏がタブー氏の約5倍という差で勝ちました！」

全員「やったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！」

タブー「許せない・・・許せないぞ！！」

タブーが暴れだした。

ほーき雲「予想通り、とことん裏切らないね。スマブラメンバー達。今が腕のみせどころだぜ！！」

スマブラメンバー一斉にタブーに突撃。

しかし、それで降参するタブーではない。必死で抵抗してくる。

フォックス「スマートボム！」

ルイージ「ファイアジャンプパンチ！」

あちこちから攻撃が飛んでくる。やはり人数では勝てないのだろうか。

ネス「スマッシュボール！」

リュカ「スマッシュボール！」

ほーき雲「さぁやっちまえ！！」

ネス・リュカ「ＰＫスターストーム！！」

無数に降る青と黄色の隕石。それをタブーは何回も当たっていく。

タブー「絶対仕返ししてやる！！絶対だぞ！」

タブーは一応去ってった。

全員「タブーを倒したぜ！」

そしてタブーは

タブー「スマブラメンバーおのれ・・・。」

タブーの近くに白っぽい男が現れた。

タブー「あいつ殺せば少しはスーッとするかな・・・？」

タブーは白っぽい男に襲いかかる。

その瞬間の出来事だった。タブーが男に触れた瞬間、はねかえすような力が自分にかかっているのがわかった。

一方通行「なンだお前？」

タブー「お前こそ何者だ！」

一方通行「何者だだと？ならば問題です。学園都市最強のレベル５といえば誰でしょうか？」

続く

5倍（後書き）

一方通行、読み方は『アクセラレータ』です。

一方通行（アクセラレータ）（前書き）

敗北したタブーのもとに現れた一方通行（アクセラレータ）。どうなるでしょう？

一方通行（アクセラレータ）

一方通行（アクセラレータ）「俺をナメンなよ三下ァ！」

タブー「お前が何者かは知らないが、俺がここで退く訳ねぇだろ！」

一方通行「ならばここで問題です。この俺、一方通行（アクセラレータ）は一体何をしているでしょうか？」

タブー「知るか！」

タブーは構わず一方通行に攻撃する。何発も何発も。撃ちまくるが、一方通行は全ての攻撃を自分に触れた瞬間にはねかえしている。

タブー「お前、反射してるのか？」

一方通行「残念。ちょっとおしいけど、俺のしていることとは違う。」

否定された。

一方通行「答えはベクトル変化。運動量、熱量、電気量。あらゆるベクトルを触れただけで変化できる。」

タブー「つまり、攻撃は当たらないって訳か。・・・・ビーム系ならね！」

タブーは今度は一方通行に体当たりをしてきた。

一方通行「こりねェやつだなァ。しょうがねェ。３０倍で反射してやるよ！あばよ三下ァ！！」

タブーが一方通行に触れた瞬間、タブーはすごい勢いで吹っ飛んだ。こうして、タブーを巡った五武山市の危機は無事ハッピーエンドを迎えたのだった。

その頃、ほーき雲の家は

ほーき雲「おっと、タブーが吹っ飛んでる。２度と来るなよ～。さぁ、明日から楽しい日常生活を送るぞ！絶対に空き家村とは言われないような愉快な場所にしてやるぞ！」

続く

一方通行（アクセラレータ）（後書き）

次回は新しい章に入ります。

大騒ぎしても近所迷惑にならない

タブーがいなくなり、平和な五武山市。しかし、空き家村では大騒ぎが起こっていた。

ほーき雲「いいか？ここは空き家村だ。そこに僕達は住んでいる。つまり、この周辺には僕達しかいないことになる。それはどういうことか。答えは大騒ぎしても近所迷惑になりにくいってことなんだぜ！さぁ、叫べ騒げの大盛り上がり大会を始めようぜ！！」

全員「おおーーーーーーー！！！！」

ほーき雲「まずは大食いゲーム！！ルールは簡単。カービィかヨッシー。どちらがより多く食べるかを賭けろ！！ちなみに僕はカービィに賭けるよ！」

ゼルダ「私はヨッシーに賭ける。」

ネス「僕はカービィに賭ける。」

カービィ「絶対負けない。大食いは僕の大事な特徴。それで負けたらカービィの名前が傷つく。」

ヨッシー「よく言うじゃん。こっちだって伊達に長い舌出して食いまくってる訳じゃないんだよ！」

ほーき雲「よーい・・・・・スタート！」

カービィ・ヨッシー「いくぞ！！」

続く

限界が知りたい。

ほーき雲「カービィに賭けた人も、ヨッシーに賭けた人も、みんなで食べ物を戦場に運びましょう。やはり用意した食べ物を全部押し込めるのは無理でした。」

全員「正直面倒だけどまあいいよ。」

こうして、みんなで大量の食べ物を運んで行く。たぶんみんな同じことを考えているだろう。

『食い過ぎだよ！普段の食事では全然満たされてないわけ！？』

そして、『戦場』に着いたほーき雲達は見た。

食べ物が無くなっている。しかも、両者共に次の食べ物を少しイライラしながら待っている。

ほーき雲「まだ余裕そうですね。」

カービィ「当たり前だよ！」

ヨッシー「早くみんなが持ってきた食べ物ちょうだい！」

ほーき雲「はい。」

テーブルに置いた瞬間、両者共に恐ろしいスピードで食らいついていく。

ルイージ「ほーき雲、もうこれで最後だよ。」

ルイージの発言を一切無視し、最後の食べ物も全て食べてしまった。

ほーき雲「これ以上食べ物は用意してないので、『2人で僕に勝った』ということにします。」

こいつらの食事量は計り知れない。

続く

限界が知りたい。（後書き）

タイトル通り、こいつらの食事量の限界が知りたい。

なお、これからこの小説のみ感想返信担当を作ります。（スマブラメンバーじゃないけど・・・）

奇数日→一方通行（アクセラレータ）　偶数日→打ち止め（ラストオーダー）

が基本ですが、時々臨時で代役が担当することもあります。その時は後書き欄にちゃんと書きます。ちなみに今日は１５日なので今日中に書いた感想は一方通行が返信します。

新登場

ほーき雲「突然ですが、新メンバーの登場です。ただし、知らない人が多いと思うので、簡単に紹介します。」

新メンバーを連れてきたほーき雲。

ほーき雲「また、これより『空き家村グループ』という名前が誕生します。」

リュカ「早く新メンバー呼んでください。」

ほーき雲「新メンバーはこちら、塊魂の王子とイトコハトコとルーキーの皆さんです。」

王子「よろしく〜。」

エース「面白そうだね。」

変わったキャラクター達がたくさん現れ、スマブラメンバーも注目している。そして中でも注目を浴びていたのがディップである。

ポポ「すごい！あちこちカラフルに光ってるよ！」

ディップ「どうもディップです。よろしく〜。」

？？？「ところで皆さんは僕の存在に気づいていますか？」

マスターハンド「わっ！！すぐ隣に透明人間！！」

ジャングル「ジャングルです。僕は透明なのでそこんとこよろしくお願いします。」

ほーき雲「こうしていいメンバー集まったでしょ。他にも特徴的なキャラクターがたくさんいるからちゃんと交流してみることをおすすめするよ。最後に空き家村グループの意味を説明します。」

突然結成された空き家村グループ。どういう意味があるのか？それは次回です。

続く

新登場（後書き）

今日は感想返信はラストオーダーがします。

打ち止め「わーいわーい。ってミサカはミサカは空き家村グループに入りたいと思いながらも喜んでみたり！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2698z/

スマブラメンバーを1つの町に凝縮中

2011年12月16日22時54分発行